
キオク キヲク

lain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キオク キラク

【Nコード】

N13980

【作者名】

lain

【あらすじ】

転生物語の変な視点からの書き方でいかにせんうp主が子供幼稚文章を永遠と貫いているのでわけわからなくカオスになるという欠点のある小説です

取り合えず転生系の小説であることには間違いないのかな???

キオク（前書き）

t w i t t e r : i a i n | e n t e r おこしやす ふんがぁ

あぁあぁ

まぁ t w i t t e r の 使 い 方 な ん か わ か ら ん け ど ね

キオク

「素数を天才数学者が階段状に表しー えー、、、、、」
今まさに高校の授業の真っ最中だ
ほとんどの生徒がボールペンを持ちコツコツ書いている……

「キーンコーンカーンコーン」

「では授業を終わりにする。号令」

「起立、気をつけ、令」

というわけで俺の自己紹介をしよう

俺は簡単に言えばそこら辺に居るような普通のよう自分で言うのもなんだが裏ではおかしな奴ということらしい

まあわかっているけど自分で言うのには少しどころではない抵抗がある

得意科目は数学 物理 理科 化学 ともはや理数系という言葉が本当に適当な人間だ

成績も首位には興味が無いが学年2位というのは少し悔しい気がするがそこまで完璧主義でもないので軽くスルーしている

「失礼します 2・Bの岩倉です」
ら一応名乗っただけだが巳代治は岩倉

職員室に用事があったか

下の名前はまた触れるだろう

とりあえず健全高校2年の17歳だ

「教室に戻りいつも聞いている音楽を聴きながら寝るとするか」とぼやいてみたりもする。どうせ昼休みだし飯もあまり食べたくないので学食はやめた。どうせ金の無駄だ

ヘッドホンを装着して寝た

学校にヘッドホンというのはいささかどうかと思うが結構こういふ物が規制対象ではなかったりもする

「・れ。おきな・い」

なんか遠くのほうで声がしている

別にどうでもいい

「これ。おきなさい」なるほど 自分に投げかけた言葉だったのかと思った

ゴス・・・・・・・・

なんかとても鈍い音がした

気がついた場所は大学病院だった

「気がつきました?!ここは病院です。授業居眠りによる血管の縮小と後頭部への衝撃によりさらに急な寝起きによる血管のシヨックみたいなものが起こりました。スキャンは完了しているので明日にでも退院できます」

との、ことだった・・・???

言っている意味がよくわからない

自分に何が起こったかを思い出すには今ひとつ何もかもが足りないような気がした

・・・???

やはりこの事態にすぐ気がついた看護師はすぐに病院の先生を呼びキオク喪失ということが明らかになった

キオク喪失でも本当に重症の部類であった

キオク喪失というものの自体は存在する

しかしキオク喪失にも重症と軽症は存在する

軽症の部類であれば起きて聞いたことを何回も聞いて聞いてを繰り返すつまり記憶することが出来ないのである

重症であれば あなたの名前は何ですか？のその質問自体がよくわからなくなりしかも考えていることさえ即忘れる始末である

しかしおかしいのはどちらにも該当はしないことだった

簡単に言えば倒れた直後程度まではキオクが存在するのである

・・・・・・？？？？

自分でもこの状態がよくわからない状態にありパニックになり言語化できなくうまくしゃべれない

それを誤診でキオク喪失ということになったのだと思われる

・・・・・・！思い出してしまった

しかも岩倉レンのキオクではないものを引き出してしまった

？

やばい 妄想という類だろう・・・・・・そう処理をしてしまったそして胸ポケットに必死に手を入れようとする自分があった・・・・・・

妄想では確か胸ポケットにタバコがあるはずである・・・・・・そしてタバコで一服しようとする自分が想像された

つまり言えば頭を打った拳句に妄想を見てそれを自分の記憶に書き換えようとしている。まさに正論だと自分では思っているつもりであった

「レン……聞こえる??」脳内にいきなり声さえ響いてきた

頭がおかしくなったのだとレンは思ったが声は一方的に聞いてきた

「まだキオクが戻ってないみたいだからキオクを重複書き込みするから少し待っててね」

レンは頭がおかしくなったと思い悩んだがその瞬間いきなり目の前が白とも黒ともならなくなった

キオク（後書き）

自分は前回挫折したので今回はあきらめたくないです！

秋山の祟り キオク弄り（前書き）

秋山郷は滅んではいません

まあ本当に良い場所です

それを言えばアニメひぐらしのなく頃に以上の場所ですね

秋山郷は一部フィクションであり現実問題も含めています。

現在も観光地として有名です

秋山の祟り キオク弄り

病院であって夢の中に現在居る そこには膨大な情報がありインデックスを1つづつ展開していく

.....

なんかどんどんあ頭の中にキオクが入っていく

そしてそのキオクの中で鮮明なものがあった

村の人々が全員侠気に呻き死んでいく様を.....

そして自分だけが残り崖から足を滑らし死んでしまった。

村の生き残りはそのことを秋山の祟りと今でもなお語り継がれている.....

そう

つまり前世のキオクが直接脳に入っていくというよりは元々存在したキオクの鍵が次々開けられていっているのであった

どんどん開いていくキオクとキヲクに目を覚ます……………

「ハア……………夢……………?」

かなりしんどい顔をして目覚めた。外は夜のはずなのに目の前には先生がいた

「起きた……………今回の事故について謝罪します。ごめんなさい。大丈夫ですか?」

校長だった

つまりあれから叩いた先生側に問題があるとして大会議が起きて叩いた先生は停職を食らったのであったことを聞かされた

「……………いえ。」今はそんなことといえば失礼に値するし先生の一生にも影響が出るがそんなことはどうでもよかった
ただ前世のキオクだけが頭に存在して今の自分の記憶のほうはどうでもいいように思えてならなかった

「とりあえず先生については即停職取り消しをお願いします。これは先生の一生にかかわることなので」

まあ実際先生の年齢は56歳であと5年か4年で退職であり一生という可能性は低いがそれでも公務員は少ない給料と高い老後が保障されることをレンは知っていたので即そという言葉が出た

本当にそんなことはどうでもいい。1人にしてほしい

「校長先生、少し聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「もし前世のキオクを思い出したらどうしますか？」

校長先生は少し複雑な顔をしてニヤツつと笑った

「もしそれが良いキオク、つまり思い出だつたらそれを大切に閉ま
つておきなあー」と校長は答えた

どちらかといえばこんなことを聞けば少々不振に思われるはずなの
だがそういうことは一切校長はなかった。いや 長い間教職をやっ
てそういうスキルが身についたのか？そう思った

「良いキオク………ありがとうございます」

「はい、また学校で会いましょう」といい校長は医者に挨拶をして
消えていった

1人になった

ここでキヲクの整理をする

自分は岩倉レン17歳 しかしその前世の記憶を今日さつき思い出
してしまった。つまりキオク凍結の解除。そしてそれは村の悪夢で

あつた

あれからどうなったのか、そして倒れる前のあの声もなんだったのだろうか

謎だった

前世のキオクということもうなずけるが実際にはあまり信用していない

信用できはしない。自分があゝの衝撃を受けながら平常な状態になることが出来るのか出来ないのか？確か医者には記憶喪失と判定したが実際はあまりしゃべれなかつただけであつたしそこまで思考が回らない状態でもあつたことは間違いない

.....

あの謎の声の出所からまずは追求することにした

脳内の今まで使われていなかった記憶にアクセスを開始した・・・
・・・やはり思い出しにくかつたが見つけた

村人で唯一自分ともう一人不可思議な超能力とでも言う能力を持つた子がいた

その子が崖から自分を突き落とした

確かその後他の村人と同じ風になつてしまつたのだろう

本当にもういい加減前世というキオクにアクセスするのはやめた

しかし声は聞こえた

「戻ってきて……………」と……………」

2日後退院して家でパソコンをいじくっていた

主にすべてのキオクを頼りにいろいろ検索した

長野県秋山郷1991年11月2日 村人が次々死亡ふもとの町津南町までは到達しない風土病にて死亡

原因は中津川と標高2000m級の山々に囲まれているため独自の生態系や伝染病 さらに地盤そのものも独立して新潟中越地震でも震度は2程度ときわめて独立性の高い場所である。その川の最長源流近くの湖で広がったウイルス性の伝染病が川を降下 伝染病は2000m級の山々を越えることなく渓谷のみウイルスが蔓延 その結果風土病となり、なんらかの原因で殺傷性の高いウイルスとなり村人全員が死亡し1名が崖から転落1名のみ生存した。村出身の人間は信心だけはしていたので秋山の崇りとなすけられた。原因がわかつているためその抗ウイルス剤も慣性しているが今はその地は無毒となっている

検索した結果そんな感じだとわかった

……………

崖から落ちたのは自分・・・・・・・・・・そして残った1人・・・・・・・・
・まさかね・・・・・・・・

とは思ったが確かめなくてはならない

その地はもう1991年から道は放置させていて毎年数mの積雪を
する場所で車では行けないだろう・・・・・・・・

その地をクリーンアップするために行った軍の人を同行させるよう
手配をした。

昔は観光地だった場所も今では人も寄り付かなくなる偏狭の地とな
ってしまったことをオカルトサイトで見た

画像はあれから自然の力で人工物が取り込まれている画像と墓郡で
あった

秋山の祟り キオク弄り（後書き）

秋山郷については秘境100選で20位台辺りに入る本当に歴史と伝説があるいい場所です

前世に取り込まれる自分（前書き）

前世のキオクがあるのと同時に自分を見失っていく回です

途中出てくる有線スピーカー放送は秋山の家庭ではどの家庭にもありません

新築の上流部の家でいきなり鳴り出して驚いた家庭もあるとのこと
です

またミタマ地区のところがちょうど溪谷入り口に当たり津南から奥へ進行方向とると右側に自然をそのままの形にしたようなダムがあります。多分ミタマから2kmも離れていないかと思われま

詳しくはニコニコ動画やyoutubeやgoogleの地図で見
てみてください

また本編で出た屋敷というのは地名であり屋敷という家ではないこ
とをご了承ください

前世に取り込まれる自分

まずは秋山郷の特徴について前世の自分が体験したことを全部復習した

人間のキオクというものは長い間使わないと圧縮してうる覚えとなる。しかし前世のキオクとなれば別なのだろうが……

結局思い出したのは穏やかな秋山の村風景と侠気に満ちた瞬間の秋山だった

「あの声の持ち主は多分前世を崖から落とした奴だろうな……そして生き残りの1人とはその子かもしれないな……」そう確信を持っていた

とりあえずその生き残りを調べることにした

その生き残りの人間は76歳の老婆……

まったく見当はずれだったようだ

それもそうだ。簡単に言えば 標高2456mという超高所に居たおかげで殺傷性風土病ウイルスに暴露されることがなかったため軽症で済んだのだ

「というこは……やはり崖から落とした奴は死んだ???」
「それ以前に前世がいくら衝撃的体験をしたからといって後生で衝撃を受けてキオクが戻る直前に崖から落とした人間の声が出てキオクが戻りましたというのもいささか不振である

つまりその崖から落とした人間は超能力者だったはずであり何かの
神的能力を使って記憶を解いてくれた???というより衝撃でキオ
クの鍵を出してくれたということなのか?と思った

とりあえず現地のふもとの町津南に現在居るのである

「こんにちは、案内人をやらさせていただきます。藤島と言います
よろしく願いいたします」

ここの事故の時に派遣された元軍人であつた……

「よろしくおねがいたします。」とりあえず秋山に入ることとし
ました

中津川溪谷でもまだ来るまで入れる場所があつたがそれはダムのた
めの道にすぎなかつた

「それにしても、こんな場所に訪れるなんて本当に久しぶりです。
いやぁーこのときはまだレンさんは生まれていませんですね。平和
な村でしたよ。個人的に観光に来たこともあり、軍派遣のときに自
分はへりの操縦をしました。」そう自慢をする藤島元軍人……さ
すが声にキレがある

「しかし本当に秋山の入り口でこんなに自然と紅葉が綺麗で自然に
溶け込む家さえありますねー」

現在地はミタマ地区だつた

ミタマ地区は溪谷入り口で溪谷入ってすぐにダムがある

つまりそこで殺傷性風土病が立ち往生していた時に秋山の全家庭に設置されている有線放送とスピーカーカーが上流地区でのウイルス発症について命がけで上流部の人間が放送をしたおかげでミタマ地区の人間は逃げることでできたのでミタマ地区とそのダムから下流の人間はあまりウイルスで死亡はしていなかったという

「ええ・・・本当に素敵な場所でした・・・風土病というものは本当にどこかのアニメやドラマでしか出ないものとはかり思っていましたし世界的に見ても本当にすごいことのようにです」若干目には力がなくなっただ感じを受けた

「ここが旧国道です。現在はこの道は自然の力により侵食を受けているので車では無理です。徒歩で行きましょう。」

キオクとは違い本当に荒れ果てていて不思議な感じがした

ずっと前 ここを何度も通った生活路だったからだ

いや・・・それでは岩倉レン自信を失っていくような感じだった

レンはどんどん無口になり軍人さんは気を使って話しかけてくれた

「そういえばどうしてこんな秋山郷を訪れようと思ったのですか？
1991年といえば17歳ですので生まれる2年前の話ですよね？」

「実は教えられない事情がありました・・・声が聞こえるんです・・・」

「声ですか……………」

「声です……………」

藤島は本当に首をかしげたようにしたが少し理解した

「どこまで奥へ行きますか？装備としては5日を十分に耐えられま
すし、あなたを見ていると自分と同じくらい体力があると思われま
すから一番奥の湖までいける能力はありますが??？」

「屋敷へお願いします」

……………

少し沈黙が起こり軍人の足が止まった

「どうしました??？」

「あなたの声というのはもしかして……………」

「??????」

「超能力少女……………」

「!!!!!!」

お互い本当に真剣な顔をした

そこで重い口を開いたのはレンだった……………

「実はこの間記憶喪失を自分はしました。そしてそのときに前世のキオクを思い出しました。秋山郷です」

藤島は荷物を降ろし岩に腰をかけた。

「話を聞こう 座って……………これは個人的な問題ではないかもしれない」

そしてすべてのいきさつをレンは藤島に話した

「参ったな……………」それは本当の話だよね???

「はい……………」レンと藤島はお互い鳥肌がたっていた

「超能力の子の名前はシホと言った」と藤島は言った

「!!!!。シホ!思い出しました!」とかなり驚いた口調でレンは

言った

「シホの超能力の内容はもしかしてあまり知らないんじゃないのかい？」藤島は深く聞いた

「実は仲がよかったのにまったく覚えていない……知らないんです。」そうレンは困った風に言った

「実は自分に能力を使ったことがあるんだ。それは予知能力に近いものだった。そして混沌にも変える能力だった。他にもまだ能力があったようだったけれど。」レンは必死に考えたがシホに対してのキオクが本当に思い出せない。ロツクをかけているのだろうか？

「自分は死にたくない、そう言っていたよ。その数年後風土病が起った」

そうつぶやき下を見下ろす藤島

「じゃあ俺を崖から落としたのはなんで……」「そうレンは思った

「多分風土病から逃れるのに来生にキオクを送ったんだろうね。崖から落とした意図はそれでもわからないけれど……」「そう藤島は言った

(戻ってきて) そうレンにはまた声がした気がした

「そつえばその後シホも死んだんですよね？俺の死体はどうなったんでしょうか？」質問が後を押すように出てくる

「崖の上から少し離れた神社でシホは死体として見つかった．．．つまり屋敷の神社内で死を待ったのだろう．．．」

「君の死体はみなと埋葬された．．．」

「そうですね．．．」

新種の風土病にかかっている死体はやはりそういう手段しかないだろうし仕方がない．．．

奥へ進んでいった

元公民館．．．．元小学校．．．．そして見えてきた．．．．
屋敷地区が．．．．

崖は今もまだコンクリートで固められてあったがいままでくる道のおおよその人工物、主に橋などは痛んでいた 同じくらいひどく痛んでいた

小学校も校庭から緑が茂っていて舗装道路も半分崩壊していたところもあった。

まさに人類が消え去った村だった

崖の上のさらに少し上には神社があった

そして崖の上には．．．．．女の子の姿がうつすらあった．．．

前世に取り込まれる自分（後書き）

秋の肝試しですか？

秋山郷は陸の孤島と呼ばれているほどの場所で本当にいい文化と歴史が凝縮されて今でも薪ストーブならびにだるまストーブなどが存在しています

ミタマ地区のお土産やさんのとなりに資料室となっている場所も存在します

また本編で出た屋敷というのは地名であり屋敷という家ではないことをご了承ください

屋敷ワラシ〓神様〓シホ（前書き）

崖の上に突き落とした女の子の姿！この場所は誰も人が居なくて寄り付くこともないはずだが・・・という感じで本文へどうぞ！作者のこの小説への裏話はすべてツイッターに書きこみまくっています [twitter:laine|enter](#) 探してみてください
い

屋敷ワラシ〓神様〓シホ

崖の上の女の子はこちらにすぐ気がついて崖に腰をかけた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの子って・・・・・・・・まさかね・・・・・・・・」

「でも間違いない、あの子だ」

藤島とレンは2人硬直してしまった

まさかここに彼女は居るわけがない

風土病が発症して若い2人も時期に感染を引き起こし死に際崖からレンは落とされシホも神社で死体として見つかった・・・・・・・・

そして崖を見た瞬間彼女は居なくなっていた2人とも走ろうとした瞬間目の前の自然によって崩壊しかけている道路が昔の姿に戻っていた・・・・・・・・

どういふことなのか2人とも検討がつかなかった

「私は土地神だからこれは別に不思議じゃないよ」

声がした・・・・・・・・後ろから・・・・・・・・

「久しぶり」

レンと藤島は振り返った

そこに居たのは知らない子……いや 中身はシホだったレンと同じ歳くらいの女の子だった

「シ……ホ……??」レンは背筋をゾクツツとさせた

それ以上に藤島もとても信じられないという顔でいた

「そうだよ 形は変わったけれどね、君がレン君だね。ここまでつれてきてくれてありがとう」そう言つとレンの頭に指を添えそのままレンは気を失ってしまった

藤島は少し身構えたがシホは愛想笑いをして手招きをした

藤島も現状だと仕方がないと思ひ屋敷の少し大きめの家へ行くこととなった

レンをシホが担ぎそれはまるで女の子に連れ去られる男の子というような感じだった

秋山はちょうど秋で紅葉満開の時で布岩が見事に絶景を楽しませてくれた

「まずは私から自己紹介をします。私はシホと言い土地神をやつて
ます。巳代治はありません。会ったことありますね。私はこの土地
を離れることができません。土地神ですので。」

「……」藤島は少し考えたがシホはかまわず話を続けた
「実はこの土地は人間が居なくなりました。もちろん風土病のせい
です。私は人間として土地神をやつていて転生操作も行うことが出
来るので自分自身は何度もこの地に生き返ります。しかし、人間は
そももいきません。そこでわざとレンを自分が風土病の影響で死ぬ
前に殺し転生をさせてこの地に戻させました。ちなみにレンは前世
でもレンです。」

「君は神様なのかい？」

「はい。」

少し重い空気が流れた

じゃあこの土地を浄化させたのも……

「私です」

「来る途中に悪路が急によくなったのも……」

「私です」

「そうか……」考え込むようにして藤島は首を垂れた

「レン君には何をしたんだ？」と藤島はすぐに切り替えた

「レンには2つの人間が居ます前世と後世です。なので1人にしました」

「つまりどういうことだ？」

「レンは自分の存在を見失っています。すべてのキオクをすべて引き出させています。直接でないとブロックが解除できないもので不便なところもあるんです。私は彼が好きです。人間も好きです。でも残っているのは1人だけ、土地を離れることも出来ずに待っていました。レンが住んでいるのは埼玉県、どうがんばってもキヲクを開放するのは遠すぎました。」

「人が居ない場所だからさびしいな……確かに本当にいい村だったのにこんなことになって……」藤島もこの村には思いいれがあった

「レンはそろそろ目覚めます。前世のレンで後世のレンのキオクを保有しています。」

藤島も黙っていた

「……………！！！！」

「起きたようだね シホがお待ちだよ。」

「一体何が……村は消滅したはずなのにこの家 もうひとつのキオクが……」

5分後

「理解しました」

あっさり受け入れたことにシホも藤島も驚きを隠しきれないようだった

「しかしこの地にとどまるのは現状じゃ無理です」レンはあっさり言った シホの顔も少し曇った

「超能力者の私に逆らうことなんか出来ない！」

「現状じゃ無理です だる神様」と無邪気そうな顔になったレンがいた

「現状だと後レンには家族も居ますし学校もあります。現状学生という段階では自由も利きません。しかし現在高校2年生の俺は1年と半年で高卒です。これで晴れて自由の身です。」もうここに居るのは初めて会ったレンではないような気が藤島にはした……

屋敷ワラシ〓神様〓シホ（後書き）

藤島への放置プレイが開催されています

かわいそうな藤島・・・まあそんなことはどーでもいいんです
今回は3話解みたいな感じでしたね

ということと今日は眠いし何もストーリーとして展開が思いつかな
かったということとで閉じます

土地神のシキタリ（前書き）

23日から秋山郷へ行ってきました。ちなみに何度も言いますがこの場所は実際に存在する地名を利用しています。これで終わりっぽく見えるけど最終話じゃないよ？

土地神のシキタリ

現在レンと藤島はミタマ少し奥のダムにある車だ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして車の後ろにはさびしそうな目をする土地神のシホだった

なんか重苦しい・・・・・・・・仕方がないだろう

「また・・・来てね。もうレンは後生のレンじゃないから・・・・・・・・」

そういつてシホはふと・・・・・・・・消えてしまった

「私も立場上津南までということとなる・・・・・・・・ありがとつ。シホとまた会えてよかったと思う。」そう藤島はつぶやいた

翌日

朝起きたらまずやること・・・・・・・・

携帯を広げて目覚ましの電源を……………

ん????なんか変な違和感を感じて目を開けた……………まぶしい

「おはよう」

それはシホだった……………

「なっ?!」

「幽霊を見るように見るな」

「なんで土地神がここまできているのさ!」レンは本当に驚愕した

「んあ?まああれだ……………神に頼んだ!そしたら出欠大サービスで村の災害をなかったことにしてくれた!そしてレンまだ気がつかないのか?とシホを見たら前世のシホの顔だった……………」そして家も自分自身も前世のままだったカレンダーは1991年だった……………

つまり、大災害が起こる当日……………

「実はその……………大災害を起こしたのは神様が風土病を特殊変異させたものだった。実は土地神が頼むまでその土地はそのままということになる。パラレルワールドって言って他の土地のそれぞれの土地神の周りでそういうことが起こっているんだ。もちろんレンのキオクは抹消されるはずなんだけれど土地神との干渉が大きかったりまた土地神が選んだ人間はその抹消を抹消することが出来る。」

「ということは秋山郷は復活したの??？」

「そっついで」と

「レンは安堵した……」

「学校へ行こ！」シホは明るく言った

秋山の空は山々の空気で澄んでいた。

土地神のシキタリ（後書き）

これはまだ終わりじゃないよ？

S、ブレイカー（前書き）

起承転結というものが存在して今回は承ですかね
今度秋山郷へ行つてまいります

S、ブレイカー

秋山の紅葉が日を注ぐ中土地神と一緒に学校へ行く……………

「シホ……………結局来生のレンは結局どうなるの?？」

「存在しなかったことになる だってここはレンにとっては生まれ
る前の過去だしパラレルワールドでもあるから」

いたって不思議ではないし確立論で言えばいろいろな状態が成立す
る。神の力は絶対だと言うことである

……………ウッ

レンは少し頭を抑えた

「レン????大丈夫?どうしたの?具合が悪そうだよ?」シホは
レンのことを様子を見ながらそこらへんの石に座らせた

「だめ……………頭が割れる……………」レンは歯を食いしばった

その瞬間シホはふつと目の前から消えたそしてレンは廃虚となった
秋山の屋敷の石に座っていたそして周りは倒れ行く村人……………

……………
「何が起こっている……………」レンは自分の体を見た……………

後生のレンの形だった

おかしい………何かがおかしい………
1991年のウィルスは神の手によって それ以前に1991年に
後生のレンは生きていない………そして自分は村人には見
えていない???これは断片化されたパラレルワールドには存在し
ていなくて自分は見ることでしかできない???

そこで思いつくのは1つ………崖だ………

そこには前世の自分とシホの姿だった レンもシホも苦しんでいた

「死にたくない………死にたくないよ!」とシホが
絶叫した

「俺も………もう後………わず………
かだつ!………」

そしてシホは呪文を唱え始めレンは虚ろな目でシホを見た………

そしてシホはレンを落とす………

「待つて!!!!!!必死に叫んでいた………自分は何を
やっているんだ 自分が叫んだところで歴史は変わるわけでは………

「?!?!?!」

確かに2人の焦点は自分に向いている………

パラレルワールドの崩壊だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1398o/>

キオク キヲク

2010年10月18日13時58分発行